

医療の現場～市立病院発最終回～（広報やまと平成21年3月15日号掲載）

狭心症、心筋梗塞

心臓は、血液を全身に送り出すポンプの役目をしています。1分間に約5ℓ、1日に大型タンクローリー1台分に匹敵する量の血液を送り出し、休むことなく働き続けています。

心疾患は、日本では死因の第2位で、中でも「狭心症」と「心筋梗塞」はその多くを占めています。

【狭心症、心筋梗塞とは】

心臓が働くために必要な血液が流れる血管を、「冠状動脈」といいます。冠状動脈の硬化によって、血液がうまく流れなくなる状態を「狭心症」、血管が完全に詰まってしまう状態を「心筋梗塞」といいます。

【症状】

典型的な症状の一つに「胸痛」があります。心臓の働きは体の動きに付随しているため、運動や日常の動作が原因となって胸痛が起こります。痛みは胸全体に出現することが多く、同時に肩や腕、あごなどが痛くなることもあります。狭心症の場合、安静にしていれば10分ほどで症状は治まります。痛みが持続する場合には、心筋梗塞の疑いがあります。

【診断と治療】

症状があるときの心電図の変化で診断します。診断手段には、「運動負荷心電図」や、心電図を24時間記録する「ホルター心電図」、心臓の状態を画像で判断する「心筋シンチグラフィ」、「造影CT」などがあります。動脈硬化の疑いがある場合に、「心臓カテーテル検査」で血管が細いことが分かれば、「風船」や「ステント」と呼ばれる金網で血管を広げることで改善できます。高血圧や糖尿病、脂質異常症のほか、喫煙も動脈硬化の原因になるので、日ごろからきちんと治療し、禁煙を心掛けましょう。

気になる症状があるときには、循環器専門医を受診してください。

（このコラムは市立病院総務課 電話（260）0111が担当しています。）